

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	有住 文博
論文担当者	主査 新村 健
	副査 岸本 裕充
	副査 松永 寿人
学位論文名	Efficacy of Intervention for Prevention of Postoperative Delirium after Spine Surgery (脊椎手術後せん妄予防介入の有効性)
<p>術後せん妄は高齢者に多い合併症であり、その発症は様々な問題を引き起こす。脊椎手術後のせん妄発生率は、他の整形外科手術より高いと報告されるが、その危険因子は同定されていない。超高齢社会の到来や手術の低侵襲化に伴い、今後も高齢者の脊椎手術が増加すると予想されることから、脊椎手術後せん妄の危険因子同定と適切な予防対策の確立が必要と考えた。そこで本研究では当院における脊椎手術後せん妄の発生率を調査し、術後せん妄の危険因子を特定し、術前スクリーニングツールを開発することを第一の目的とした。次にこのスクリーニングツールを利用してせん妄リスクが高いと予想された患者に対して介入を行い、せん妄発症予防効果が認められるかを検証することを第二の目的とした。</p> <p>2013年から2014年に兵庫医科大学整形外科で脊椎手術を行った294例を介入前の前期群(A群)とし、危険因子の同定、スクリーニングツール(Delirium Screening Tool after Spine Surgery: DSTSS)開発を行った。次に2016年から2017年に同施設で脊椎手術を行った265例を介入後の後期群(B群)とし、DSTSS 4点以下の低リスク群、5~9点の中リスク群、10点以上の高リスク群に分け、中リスク群、高リスク群にはそれぞれ多面的な介入を行った。せん妄評価はConfusion Assessment Methodによった。</p> <p>A群におけるせん妄発生率は22%で、ロジスティック回帰分析より、精神疾患の既往、ベンゾジアゼピン系睡眠薬使用、高齢(70歳以上)、難聴、ICU入室が危険因子として抽出された。その結果に基づきDSTSSを作成し、B群における中リスク群35例、高リスク群35例に対して介入を行ったところ、全体のせん妄発生率は13%と低下した。せん妄の重症度評価では、危険行動が有意に低下し、ライントラブルも減少傾向にあった。</p> <p>以上の結果から、DSTSSは脊椎手術後せん妄のリスク評価に有用であり、介入を適切に実施することでせん妄発生率を減少させることが明らかにされた。簡便な脊椎手術後せん妄リスクスクリーニングツールを独自に開発し、その有用性を証明した点で、本研究は学位に値する研究と評価された。</p>	